

## 福島第 1 原発を視察

静岡県議会原発・総合エネルギー対策議員連盟の議員 25 名で福島第 1 原発に行ってきた。福島第 1 原発事故処理という言葉を目にする機会は多い。連日、地下水が汚染され太平洋に垂れ流し状態になっているというニュース報道も耳にする。しかしながら、その具体的中身は、私を含め殆どわからないのではないかと思う。現在の福島第 1 原発は一体どんな状況なのか、この目で確かめてきた。

### ■ J ヴィレッジから福島第 1 原発へ

8 月 30 日午前 8 時、集合場所の福島第 1 原発から約 40 キロメートル、福島県双葉郡の楡葉町と広野町の町境にある J ヴィレッジでまず各自の内部被爆線量をホールボディカウンターで測定（視察後も測定）。J ヴィレッジは、もともと 1997 年に開設された日本最大規模のサッカートレーニング施設だ。東日本大震災後は事故収束作業の拠点として、出資者でもある東電が利用している。施設内では原発事故処理で働く 3000 人の作業員が生活している。建物内には作業員に対する全国からの励ましの寄せ書きや千羽鶴が数多く飾られていた。

J ヴィレッジをバスで出発し国道 6 号を北上、楡葉町と富岡町を通り大熊町にある福島第一原発へ向かう。楡葉町は昨年 8 月に日中の出入りが自由な避難指示解除準備区域に指定され、交通量はかなり多い。ガソリンスタンドも一部営業している。昨秋から除染も進められており、車窓からは除染作業員の姿や、除染で発生した汚染土が黒いビニール袋に入れて大量に積み上げられているのが方々に見える。ただ、汚染土の最終的な処分場は決まっていない。その北の富岡町は今年 3 月 25 日に警戒区域を解除され、放射線量に応じて帰還困難区域・居住制限区域・避難解除準備区域の 3 つに再編された。検問を経て帰還困難区域に入ると、窓ガラスが割れ、品物が棚から散乱したままの商店が目立つ。地震後、住民は片付ける間もなく避難し、今も戻ることがままならない。早期の帰還はむずかしいと改めて感じる。

### ■ チェルノブイリより困難？

現在、福島第 1 原発の放射性汚染水漏れはレベル 3 の深刻な事態にある。私たちの視察ルートも大幅に変更されたが、1000 個を超える汚染水貯蔵タンクが立ち並ぶ光景に目を奪われる。タンクに混じって、廃棄物を貯蔵する四角いコンクリート製の容器群。タンク群を取り囲むせきの外周を歩く。何とも言えぬ

緊張感だ。そして、この状況を世界が注目していることを、私たち日本人は再認識しなければいけない。

専門家ではない私に汚染水処理の仕組みや保管計画はわからない。ただ、もともと震災による原発施設の損害の実態さえ詳しく把握できていない現状で、何もかも「一時しのぎ」でやってきたことは容易に推察できる。

視察前に国会事故調査委員の田中三彦先生から受けたレクチャーが心から離れない。田中先生は「旧ソ連のチェルノブイリ原発事故（86年）はほとんどの燃料が炉外に吹き飛んだため、建屋をコンクリートで覆う「石棺」で廃炉にした。スリーマイル島原発（TMI）は圧力容器の中で燃料がとどまったが、福島第1原発の場合、1～3号機で圧力容器が破損。1号機では格納容器の底にあるコンクリートの床を侵食し、より深刻だ。しかもTMIは原子炉1基だけの事故だが、福島第1原発は1～4号機で起きた。福島の作業は数倍困難で、信じがたいほどの努力と国際レベルの最高の知恵が必要だ」と。

私たち国民は安全神話を信じ、原子力発電を承認し国と契約した。しかし、その安全神話が壊れた今こそ、もう一度、国民と特に立地自治体と再契約する時期ではないだろうか。

静岡県議会議員  
天の一